

## キリスト教徒は新しい“人種”か？ －パウロ書簡と初期キリスト教に見る民族性と文化摩擦！－

サムエル・フォレンヴァイダー

### 要旨

ディアスポラのユダヤ人として、使徒パウロが民族性への鋭い自覚を持っていたことは疑い得ない。東地中海地方で伝道者として働き、種々雑多の人々からなる共同体と連動しつつ、民族的多様性に定期的に出会っていたパウロは、民族的用語によって人類を描写する。歴史家以外で、人類をこれほど顕著に民族的用語で考察する古代の作家は、恐らく他にはいないだろう。

本稿では、まず、キリスト教徒が「第三の種族」として描かれている『ディオグネトスへの手紙』における「民族性」という範疇の射程を問う。第1コリント書（特に1:18-25）とロマ書は、パウロが、キリスト教のアイデンティティを描写するために、民族的範疇の助けを借りていることを示している。しかしより大きな重要性は、キリスト教徒をユダヤ人や異教徒あるいはギリシャ人から区別することよりも、キリスト教徒を神の民（「イスラエル」）として「神—民族的」に描写することにある。

### キーワード

民族性、ディオグネトス、キリスト教徒のアイデンティティ、教会、イスラエル

## 1. はじめに

使徒パウロが、私たちが今日「民族性」と呼ぶものに対する鋭い認識を持っていたことは疑い得ない<sup>2</sup>。ディアスポラのユダヤ人として、彼は人生の早い時期に多民族性を経験した。キリスト教徒の共同体を「迫害」した時（ガラ 1:13、フィリ 3:6）、彼は、周囲からイスラエルを分離する境界という明確な概念をもってそれを行ったのである<sup>3</sup>。キリスト教への改宗を経て、パウロは異邦人への使徒としての緊急の召命を感じたようである（ガラ 1:16、2:7）。東地中海地方で伝道者として働き、種々雑多の人々からなる共同体と連動しながら、彼は民族的多様性に定期的に出会っていたはずである。それゆえ、民族性について考察する際にパウロに注目することは、理に合ったことである。しかしまずは2世紀後半のいくつかの報告を見ることから始めよう。

## 2. 「第三の種族」としてのキリスト教徒—『ディオグネトスへの手紙』—

「民族性」の研究、特に Denise Buell の『なぜこの新しい人種なのか』<sup>4</sup>で、いわゆる『ディオグネトスへの手紙』は重要なテキストであることが証明されている。この2世紀のテキストは、勧告の言葉（logos protreptikos）、すなわち読者にキリスト教徒の生き方を採用するよう勧める言葉である<sup>5</sup>。

『ディオグネトスへの手紙』は、キリスト教徒を、ギリシャ人、ユダヤ人と並行する「第三の種族」としている。これら三つの人種が全人類を包含しているようである。その分類はプロローグの中で提示されている（1:1）。

一流の人ディオグネトスよ、私はあなたがキリスト教徒の宗教について学びたいと熱望しており、彼らについてそのような明確で注意深い問い合わせをしているのだとお見受けする。彼らがいずれの神を受け入れているのかについてのみならず、彼らとその神をどのように礼拝するのかについても—その結果彼らは皆、世界を無視し、死を嘲笑し、ギリシャ人たちが神々と考えるものを認めることも、ユダヤ人たちの迷信に同意することもない—、またいかに深い愛情を彼らが互いに対して抱いているのかについて、そしてなぜこの新しい種族あるいは生き方が、以前にはなく今生じているのかについて<sup>6</sup>。

キリスト教徒たちの *theosebeia*、すなわち彼らの「神を礼拝する敬虔な流儀」は、一方でギリシャ人たちの多神教的宗教に対置され、もう一方で「ユダヤ人たちの迷信」に対置されている。彼らの宗教に加えて著者は、キリスト教徒に特有の特殊な社会の一貫性、すなわちその *philostorgia* を指摘している。著者は、キリスト

教徒の倫理の二つの支柱—すなわち神に対する関係と、隣人に対する関係（マルコ 12:29-31）—を、*theosebeia* と *philostorgia* の語に要約される、キリスト教徒の民族的アイデンティティの標識のようなものへ変換しているようである。この手紙の著者は、キリスト教が「新しい種族あるいは生き方」であると言っている。

一見したところ、ここにはギリシャ人、ユダヤ人、キリスト教徒という三つの種族あるいは人種のリストがあり、それらはすべて、その宗教によって特徴付けられている。この三区分別モデルがテキストの最初の部分を形づくっている（2:1-6:10）。この部分で著者は、ギリシャ人とユダヤ人それぞれの特徴的な礼拝様式の輪郭を際立たせながら、盛んに他性を構築している<sup>7</sup>。しかしこのリストを打ち出す前に、この著者は手紙の読み手に向かって語っている。すなわち、ディオグネトスは「初めからそうであるかのように、新しい人間」となるように招かれており、そうすることにおいて、彼は「新しい言葉」、新しい教えを「聞く者」となるのだ（2:1）<sup>8</sup>と。焦点は明らかに、創造の点から定式化され、このテキスト—第三の種族の一員となること（すなわち、キリスト教徒となること）が意味するものへの明らかな言明—を読むことによって認識される、何か「新しい」という概念にある。

さて、ギリシャの偶像崇拜とユダヤ人の迷信に対抗する伝統的な議論を脇に置いて、5、6章におけるキリスト教徒の描写へと向かおう。手紙の著者はここで、キリスト教徒の *theosebeia*、すなわち彼らの「神を礼拝する特定の流儀」の「秘密」を開示する。5章では *ethnos* であることの一連の基準に出会う<sup>9</sup>。三要素からなる民族性のリスト（領土・言語・慣習：5:1-2、5:4）は、宗教の中心的側面であるキリスト教の教えへの言及（5:3）によって増大されている。『ディオグネトスへの手紙』の修辞は洗練されている。領土・言語・慣習の基準はキリスト教には対応していない。キリスト教徒たちは「ギリシャ人や未開人の町々にも住み」、その生活様式に関して何も違わない。彼らは「衣食住などに関して地域の慣習に従う」。しかしながら「彼らは、賞賛すべき、そして文句なしに普通ではない彼ら自身の市民性（*citizenship*）の特徴を示している」。

この文書は、パウロ書簡からの素材を用いながら、段々とその他の比喩的領域を持ち出す。初めの移行は、民族的範疇から、市民的・政治的範疇への移行である。この著者は、外国人と市民、外部からの者とその土地で生まれた者とを鋭く対比させる<sup>10</sup>。これは、パウロのコリントの信徒たちへの往復書簡から取られた逆説的定式化によって枠付けられている。その箇所のまましく最後の 5:17 で、テキストは民族的範疇へと戻る。すなわち「彼ら（すなわちキリスト教徒たち）はユダヤ人たちによって外国人として攻撃され、ギリシャ人たちによって迫害されている」と。

6章で、更なる決定的な移行が行われている。キリスト教徒たちは生ける体の中の魂と比較されている。キリスト教徒たちは「世界のすべての町々に散らされている」がゆえに、一つの類推が提示される。すなわち、魂も「体のすべての部分に散らされている」のである。この著者は、魂と、体に対する魂の関係についてのプラトン哲学の教えから哲学的概念を取り上げる一方で、キリスト教・ユダヤ教のいくつかの古い伝統に言及する。それは、正しい者・敬虔な者に、世界を維持する、あるいは少なくともその終わりを遅らせる者としての特別な地位を授ける伝統である<sup>11</sup>。ここで私たちは、非常に異なった比喩の領域に直面させられる。しかしながら、著者がキリスト教徒たちの *theosebeia* を目に見えないものとして言及するとき (6:4)、その主要なテーマは残存している。この文書は、キリスト教徒の宗教の可視性と不可視性との間の特徴的な相互作用、世界の中でそれが位置する空間と世界を超えてそれが位置する空間との間の特徴的な相互作用、文化的肯定と文化的分断との間の特徴的な相互作用を強調している。この運動において、パウロの遺産は『ディオグネトスへの手紙』の神学に特別なインパクトを与えている<sup>12</sup>。

さて、民族性についての問い、すなわちキリスト教徒のアイデンティティ探求における民族的範疇の状況の考察に向かおう<sup>13</sup>。三つの人種、とりわけ「第三の種類」の出現というような民族的範疇は (使われているギリシャ語の単語は、意味論上広い範囲を伴う *genos* である)、キリスト教徒とその宗教を説明するための—この説明には、教養ある異教徒について述べる *ad extra* の次元と、キリスト教徒の自己アイデンティティについて述べる *ad intra* の次元の二つの次元がある—基盤の役目を果たしている。彼らの宗教に基づいて、キリスト教徒たちはこの視点から、ギリシャ人とユダヤ人と並びつつも性質の異なる *ethnos* として認識されている<sup>14</sup>。

更に『ディオグネトスへの手紙』には、キリスト教の民族的定義を超えていく強い傾向がある。初めに、キリスト教徒について、領土・言語・慣習に関して他の人々と何ら違わないとの言明がある。しかしながらこのことは、キリスト教徒が独特の「民族性」を形成することを妨げはしない。というのも、宗教こそが「第三の種族」の特性であるからである。さらに重要なことは、著者がどれほど俊敏に、民族的範疇から他の範疇へ—市民的・政治的比喩 (主に市民性) へ、そしてその次に心理学的・宇宙論的比喩へも—移行しているか、ということである。この移行は、キリスト教徒のアイデンティティに属する逆説の言語によく適合する。逆説の修辞は、民族的範疇の力を弱める。民族性はただ、キリスト教徒のアイデンティティ構築において、キリスト教徒の自己定義にとってより中心的に思われる他の比喩的集合体によって補われる、数ある中の一つの形成的なパターンであ

るに過ぎない。

パウロに向かう前に、人間の三部類モデルの現存する文書的証拠に簡単に言及する<sup>15</sup>。『ペトロの宣教 (Kerygma of Peter)』も三区分からなるパターンを含んでいる。キリスト教徒は明確には「第三の種族」と呼ばれてはいないが、彼らは「新しい種類の礼拝」「神の第三の種類の礼拝」を披露している<sup>16</sup>。『アリスティデスの弁証論 (Apology of Aristides)』の場合は、テキストの不整合が注目に値する。すなわち、最良の版であるシリア語版とアルメニア語版の写本は四種類の人間(未開人、ギリシャ人、ユダヤ人、キリスト教徒)<sup>17</sup>に言及する。その一方で、ギリシャ語版は、三種類しか言及しておらず、しかし更なる分類を伴っている<sup>18</sup>。宗教という基準に基づいた民族的範疇を経由してキリスト教を描写する2世紀の伝統—少なくともアリスティデスとディオグネトスの場合—があるように思われる。これは、キリスト教徒のアイデンティティの自己定義を含むキリスト教信仰の弁証的表明の枠組みの中に置かれている<sup>19</sup>。しかしながらパターンの変動性が非常に大きいため、その歴史的的重要性にそれほど大きな比重を置くことはできない。三つの組自体は、三つの異なる測定基準からなる。すなわち、①異教徒の礼拝の描写は、敬虔なユダヤ人を堕落したギリシャ人と対照させるユダヤ的対比に起源を持っている。②ユダヤ人の描写は、異教徒の典型を利用している(ユダヤ人は迷信的であるとみなされている)。③キリスト教徒の描写は、初期キリスト教徒のいくつかの自称に拠っている。

### 3. パウロの三つの *ethnē* : 第1コリント書 1:18–25、10:32 の場合

さていよいよ1世紀、パウロへと向かおう。一見したところ私たちはここで、異邦人对ユダヤ人という民族的範疇のユダヤ的区別に出会う。いくつかの箇所では「ギリシャ人」は「異邦人」と交替している(ロマ 1:16、2:9–10、3:10、1コリ 1:22、12:13、ガラ 3:28)。パウロはギリシャ人と未開人というギリシャ的区別を一度だけ採用する(ロマ 1:14)。この区別については、後で再び見ることとする。目下のところ、第1コリント書で見られる三種類の人間のパターンに集中する。主要なテキストは1:18–25である。

コリントの共同体の分裂というコンテキストの中で、パウロは自身の福音宣教について組織化された考えを表明している。そこでは「十字架の言葉」が、多様なコンテキストでの受容の点から記述される。最初の、そして主要な区別は、「滅んでいく者たち」と「救われつつある私たち」(1:18)の二つのグループの分類である。パウロが、コリントの共同体にとって魅力的なものであった「知恵」に関する論議に携わっていることもまた見えてくる。22–24節「ユダヤ人はしるしを

求め、ギリシャ人は知恵を探す」の箇所、パウロは民族的範疇へと移行している。この区別は後には「ユダヤ人と異邦人たち」と表現されている。こうして（ユダヤ人の視点から）*Hellēnes* と *ethnē* が融合されているのである。

23 節では、二者モデルが第三の範疇「十字架につけられたキリストを宣べ伝える」「私たち」によって増大されている。ここで再び、人間世界を構築するための三者からなる区別を見る。この箇所は、キリスト教徒の共同体に関する「民族性」の先例となる事例と思われる。先に見た三者からなる人種モデルとは違って、*ethnē* が定義される基準は明らかでない。それは宗教ではなく、むしろ議論のもとにある特定の文化的特徴である。ユダヤ人は一もし「しるし」が、歴史の中での神の力強い公約と、神のメッセンジャーに彼らと与える正統性に言及しているのであれば—そのメシア思想によって同定されている。ギリシャ人の「知恵」は、ギリシャ人の教育・生活・政治といった要素の中で、哲学や知識が担う桁外れに大きな役割を指しているように思われる。

私たちはここで、民族的な語彙というより文化的な語彙を扱っているのである。実際、ヘレニズム文献で *Hellēn* という語彙が、「同じ血を共有すること」よりも、ギリシャの *paideia*（教育）と文化への参与を指していることは、よく知られている<sup>20</sup>。

#### 4. 民族性と文化的特質の視点

「民族性」については、遺伝的血統の点からよりもむしろ、アイデンティティの推論的構造の枠組みの中で理解することが一般となっている。民族性は文化的事柄であって、本性的なものではない。それゆえ民族性は、文化理論の点から議論される必要がある<sup>21</sup>。実際、文化的特質は、民族性・ジェンダー・社会的地位・経済といった、古代社会に特徴的ないくつかの要素を包含・統合する範例を提供する。

「十字架の言葉」に関するパウロの言述は、より広大な文化的環境と、真の知恵と哲学についての議論の中から生じている、初期のキリスト教徒の声である<sup>22</sup>。パウロは代替的な種類の知恵を宣言する。彼は外部からの知恵を告知している。彼は下からの知恵を提唱している。この声は1世紀の地中海文化—ヘレニズム化を受け、ローマ帝国の政治的マクロ構造と融合した文化—の中での文化的緊張を表現しているようである。私たちは、このグローバルな文化のもとで、自分たち自身の民族性のようなもの・生活様式・知恵を組織化する一時には支配的文化と鋭く対立し、帝国の求心力に抵抗する—いくつかの局地的文化、あるいはサブカルチャーに遭遇する。「すべての価値の転換」（1 コリ 1:27–28）は、イエス・キ

リストの十字架<sup>23</sup>によって象徴されるのだが、それは文化的特質の点から解釈され得る。

## 5. 「未開人の哲学者」タティアノスへの間接的言及

上記で輪郭を示された文化摩擦について、2世紀の有益な例がある。シリア生まれのキリスト教徒の護教家タティアノスによる『ギリシャ人に対する講話（Oratio ad Graecos）』である<sup>24</sup>。ユスティノスと違いタティアノスは、ギリシャ人及びその *paideia* と知恵とを、好戦的で自意識過剰な方法で攻撃している。彼は自身を、歪んで脆弱なギリシャのものよりも優れた、未開人の哲学の解説者として宣伝する。

外国人に対して完全な敵対的態度を持続させるな、ギリシャの人々よ。また彼らの信じるものに憤ってもならない。というのも、あなたたち自身の慣習のうちで、外国の起源を持っていないものがあるだろうか？・・・そういうわけで、模倣や発明と呼ぶのを止めなさい。・・・これが、私自身がそこで非常に高名であったにもかかわらず、私たちがあなたたちの知恵の学派を断念した理由だったのだ<sup>25</sup>。

タティアノスは、現存するヘレニズム・ユダヤ人弁証家たちの文献からよく知られている多くの表象や議論—年齢についての議論、盗みについての文彩、文化の創案者たちの系譜、等—を扱っている。タティアノスがギリシャ人対未開人というギリシャ的区別を用いていることが、特に興味深い。もっとも、彼は完全にそれを逆さにしているのではあるが。ところで、タティアノスは、聖書・モーセ・預言者・共通の諸伝統に言及する際に、ユダヤ人をキリスト教徒と一緒に位置付けているようであり、ユダヤ人はその民族的配列から実質的には姿を消している。

タティアノスのギリシャ人への講話の最後の部分は注目に値する。民族的出自と文化的形成が明らかに結び付けられている（42:1）。

ギリシャの人々よ、これらすべてのことを、私はあなたたちのために編集した。—私タティアノスは、未開人たちの中の哲学者であり、アッシリアの地で生まれ、初めあなたたちの学問において教育を受け、その次に、私が宣べることを公言しているところのものにおいて（教育を受けた）。

この種の文化的民族的論議は、ヘレニズム・ユダヤ人文献でも、弁証的著作<sup>26</sup>の

みでなく黙示的テキストでも見ることができる。特にエノクの黙示は支配的なギリシャの知恵と科学に対応する教えを提示している。

## 6. もう一度、第1コリント書1章における民族性について

キリスト教徒及びその反一知恵は、世界的ヘレニズム・ローマ文化内部での文化摩擦の枠組みの中に位置付けられなければならない。ここで、民族的範例は特定の文化的次元を持ち、文化批評的要素を含む。民族的論議はそれ自体、ギリシャ・ローマ世界の中での文化競争の一部である。

このマクロな視点から、第1コリント書の箇所へと戻ろう。22-23節で、私たちはユダヤ人起源の民族的区別—ユダヤ人と異邦人あるいはギリシャ人との対立—に出会う。しかしその区別は、第三のグループすなわちキリスト教徒によって増大されている。三者からなるモデルは 10:32「ユダヤ人にも、ギリシャ人にも、神の教会にも、あなたがたは人を惑わす原因にならないようにしなさい」で再び現れている。33節「わたしも・・・すべての点ですべての人を喜ばそうとしているのですから」は、このリストが人間全体を包含していることを示唆している<sup>27</sup>。panta pasin というフレーズはパウロが、彼の適合能力について語った前の箇所が登場している(9:19-22)。それにもかかわらず、民族性としてのキリスト教の描出にはいくつかの明らかな制約がある。四つの点を指摘しよう。それらの中のいくつかは、私たちに『ディオグネトスへの手紙』を思い起こさせるだろう。

(1) このテキストにおける主要な区別は民族的なものではなく、救済論的のものである。すなわち 18節のプログラマティックな言明で述べられているように、「失われる者たち」と「救われる者たち」との間の違いであり「第三の命題は与えられない (tertium non datur)」。

(2) 24節で、ユダヤ人とギリシャ人の区別は、「召された者たち」であるキリスト教徒の間でも再び現れている。初め三つのグループのように見えたものは、今や、それぞれの側に二者ずつの四つのグループとして現れる。

(3) 26節から、民族的範疇は社会的範疇へと移行する。民族性は、アイデンティティの他の指標の中の一要素に過ぎない。

(4) 26-31節において、パウロは神の働き・選び・創造的力に焦点を当てる。28節は無からの創造 (creatio ex nihilo) に言及している。キリスト教徒が何であろうと—彼らは完全に異なる秩序とレベルに属しているのである。これは 1コリ 10:32でも証明される。そこでは「神の教会」が「ユダヤ人とギリシャ人」に対置されている。「神の教会」は民族的な用語ではなく、実に準民族的な用語ですら



ない。

上記の点をまとめると、キリスト教徒の民族的な描写は従属的な考察の事柄となった。それは存在していないわけではないが、決してパウロの教会論の中心的な部分の表明ではない。

このことはドイツの釈義で「脱相違定式 (Entdifferenzierungsformeln)」(1 コリ 12:3、ガラ 3:28–29、6:15–16、コロ 3:11)と呼ばれる定式によって強められる。否定形で語られる前半部分で、その定式は高度に標準化されている。民族的違いはキリストにおいて放棄され、ユダヤ人とギリシャ人は平等である。逆に後半ではより多くの多様性が見られる。最も印象的な言葉は、ガラ 6:15 の「新しい創造」という言葉である。信仰者たちの共同体は、ethnos として理解されるものを超えていくのである。

新しい創造を指し示すガラテヤ書における定式は、別の領域からの比喻によって補完されている。3章で、キリスト教徒たちはアブラハムの伝統に加わる。6:15–16で、彼らは「神のイスラエル」と同定されている。私たちはここで、神の選びの民であるというユダヤ人の主張を反響させる「神—民族的」自己描写に出会う。この「神—民族的」要素は1コリ1章でも見られる。そこでは創造の言語が選びの言語と結び付けられている。神は愚かな者たち、低い者たち等を選ぶのである。言うまでもなく、ユダヤ人の伝統では、選びの言語と創造の言語は織り合わされている。パウロの場合、それらは急進的なものとなっている。彼の十字架の神学は、神による行動・創造・選びを中心に置く、深い神学的確信を基礎として構築されている。

まとめると、私たちは1コリ1章で、非信仰者の一般的世界を指す、明らかに民族性に属する言語を示唆する言述に出会う。信仰者たちを第三のグループとして単純に並列させることによって、一見したところキリスト教もまた、民族性の点から理解される。その一方でこの民族的自己描写は、キリスト教の民族的側面が周辺部分へ追いやられるほど強烈にパウロの教会論・救済論に浸透しているその他の表象によって優位性を奪われている<sup>28</sup>。人間の「第三の種族」である代わりに、キリスト教徒は「新しい創造」として、また同時に神の選びの民として描写されている。

## 7. パウロの聞き手に対する適応能力 (1 コリ 9:19–23)

前述の箇所 (1:22–24、10:32、12:31)に加えて、パウロは、自身の適応能力を描写する際にも、民族的存在に言及している (9:19–23)。偶像に備えられた食べ

物の問題を扱いながら、彼は自身を、他者に仕えることで実現されるキリスト教徒の自由の例として描写している。20-21 節で、彼はユダヤ人の中での彼の振る舞いを、異邦人の中での振る舞いとは違うものとして言及している<sup>29</sup>。パウロは段々と、はっきりとした民族的用語から離れていく。彼はユダヤ人への明白な言及から始めている。ユダヤ人はトーラーの遵守によって定義されている(20 節「ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました」)。異邦人はとりわけ、律法の下にない存在として同定されている(21 節「律法を持たない人に対しては、律法を持たない人のようになりました」)。彼は彼の聞き手たちをユダヤ人の視点から描写している。しかし、パウロが意図的に「強い人々」を無視しつつ「弱い人々」に言及する時(22a 節)、議論は別の方向へと向かう<sup>30</sup>。最終的に、22b 節「すべての人に対してすべてのものになりました」は、パウロの基本的な宣教原則を強調する強固で一般化する主張を伴いつつ、すべての民族的レベルを超えていく。

ユダヤ人と律法を持たない人々すなわち異邦人に適応しつつも、パウロ自身はただ「ユダヤ人のよう」、「律法を持たない人のよう」であるとして、彼は自分自身に対して別の種類のアイデンティティを主張している。先に議論された箇所(1:22-24 と 10:32)のコンテキストで読まれるとき、パウロは自身を、ユダヤ人でもギリシャ人でもない別の種類の人々の代理人として提示している。22b 節は、パウロの使徒性の暗黙のキリスト論的描写の点から読むことが可能である。なぜなら、イエス・キリストこそが「律法の支配下にある者を贖い出」すために、「女から、しかも律法の下に生まれた者として」遣わされた存在であったからである(ガラ 4:4-5)<sup>31</sup>。しかしながら、ユダヤ人と異邦人から距離を置いて立ちつつ、パウロは自身を「第三の種族の」人種の代表として描写しているのではない。パウロが自分のアイデンティティを、ユダヤ人・異邦人のアイデンティティとは異なるキリストの使徒として説明しようとする時、彼は素早く民族的要素を超えていくのである<sup>32</sup>。

## 8. ロマ書における民族的感性

ロマ書でパウロは、民族的な事柄に対する感性を示している。序では「ほかの異邦人」と並行して、ローマ人を *ethnē* として扱っている(1:13)。「ギリシャ人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任がある」(1:14)との彼の自己描写は、その初めの部分で、古代ギリシャの区別を引合いに出しつつ一般的定式を利用している。ユダヤ人自体は民族的全景の一部ではない。パウロはユダヤ人の構成要素を付け加えている<sup>33</sup>。16 節で、私たちはよく知られるところの「はじめ」言説の最初の例に出会う(2:9-10 と比較せよ)。「・・・福音

は、ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです」(16節)。ここには、ユダヤ人を最初の地位に置くユダヤ的区別がある。ギリシャ人と異邦人は、ロマ書の後半部分でそうであるように、ほぼ同一のものである。ロマ書全体の議論は、キリストにおいてユダヤ人と異邦人との救済論的違いは放棄されているとの確信によって支配されている(2:11、3:9、3:22、3:29、10:12-13)<sup>34</sup>。それにもかかわらず、ユダヤ人は、イスラエルと共にある神の歴史の中での役割という点では、「はじめ」の地位を帰されることで区別されている。しかしながら、ロマ書でのパウロの民族的感性にもかかわらず、彼は民族的範疇を決してキリスト教徒と結び付けることはない。その代わりに私たちが出会うのは、「イスラエル」の概念、すなわちユダヤ人であろうと異邦人であろうと神の民であるキリスト教徒たち、である。ここでもまた、キリスト教の「神一民族的」概念が描かれている。

## 9. 結論：パウロにおける民族性

(1) パウロは民族的な事柄を鋭く承知しているがゆえに、民族性の研究による基盤を提供する。彼は全人類を民族的用語で描写する。キリストの使徒として、彼は「ユダヤ人とギリシャ人」に語りかける。歴史家以外で、人類をこれほど顕著に民族的用語で考察する古代の作家は、恐らく他にはいないだろう。

(2) パウロにおける一つの重要な文彩は「ユダヤ人とギリシャ人」である。これは「ギリシャ人と未開人」というギリシャ的対比のユダヤ版である。2世紀の文献では、ユダヤ人の一キリスト教的リストは「再」ヘレニズム化される(ギリシャ人/ユダヤ人が、時に未開人によって補完されている)。当然、ギリシャ的区別は明確であり続けており、キリスト教徒とユダヤ人は未開人の中に数えられている(ユスティノス、タティアノス)。

(3) 少なくとも1コリ1章で、パウロはキリスト教徒を、ユダヤ人とギリシャ人と共に特別な種類のグループとして描写している。キリスト教徒のこの民族的側面は文化的基準に基づいている(すなわち、宗教上の教えの特有の要素である、キリストの宣教)。三者から成る人類の描写は、2世紀の文献の類似のリストと比較されるかもしれないが、直接の間テキスト的關係は何も見当たらない。これらのテキストは、キリスト教徒のアイデンティティを民族的範疇の手段で輪郭付けつつ、多文化・多民族社会のコンテキストにおいて意味を成しているのである。キリスト教徒の自己定義の必要性は、外部・内部双方からの要求によって動機付けられている。キリスト教一異教徒の境界への特別の関心を示す第1コリント書は、そのような枠組の中で解釈することもできるだろう。

(4) キリスト教徒に関するパウロの描写への民族性の影響は、二つの主要な要素によって特徴付けられる。①キリストにおいて民族的境界線は放棄されるので、その信仰者たちは、「この世」の基本構造と対照的な完全に新しい現実を形成する。彼らは「新しい創造」であることを宣言する。②キリスト教徒は、旧約聖書及びユダヤ人の伝統が神の選びの民と呼ぶものと同一視されている。これらの線に沿って、異邦人の過去が再記述される。彼らは新しい起源を持つのである。イスラエルの歴史が彼ら自身の歴史となる(例えば1コリ10:1-4と比較せよ)。パウロはキリスト信仰者のこの新しい歴史を特にアブラハムに結び付ける(ガラ3章、ロマ4章)。しかしそこには基本的な断り書きが存在する。すなわち、パウロの教会論は「救済論的連続」<sup>35</sup>の上に構築されているのではなく、むしろ選びと再創造の神中心的概念の上に構築されている、ということである。パウロはユダヤ人イスラエルの「名誉ある相続権」を強調することができるが、それは救済論的側面を再輸入することなく行われるのである。

(5) パウロは疑いなくキリスト教共同体内での、異邦人とユダヤ人の民族的伝統に気が付いている。「召された者たち」は肉においてはギリシャ人あるいはユダヤ人であり続けている<sup>36</sup>。しかしながらパウロは、民族的範疇に頼ることで共同体内の当時の問題を扱うということをほとんどしていない。そのようなことは、ロマ14-15章や1コリ8-10章で、強い者と弱い者との間の不和に彼が対処する時、実質的に欠如している。アンティオキア事件(ガラ2:14-15)でのパウロの説明に見られる民族的用語は、彼の回顧的部分に過ぎない。敵対者及び彼らが民族性に訴えかけることに対処するにあたり、パウロは妥協せずに「ユダヤ人もギリシャ人もない」との原則に言及する。そしてその原則に基づいてパウロは、「神一民族的」そして同時に「単一民族的」範疇を用いて、キリスト教を「イスラエル」として表現することができるのである。

訳者：大澤 香（同志社大学研究開発推進機構・神学部特別任用助教）

## 注

- 1 本稿は *Early Christianity* 8 (Tübingen: Mohr Siebeck, 2017), 293-308 に収録の論文 S. Vollenweider, "Are Christians a New 'People'?: Detecting Ethnicity and Cultural Friction in Paul's Letters and Early Christianity" に若干の修正を加えたものである。本誌への掲載は、Mohr Siebeck 社からの特別許可に基づいている。
- 2 聖書解釈学の目的のための「民族性」への有益なアプローチとして、以下を参照。C. W. Concannon, "When you were Gentiles": *Specters of Ethnicity in Roman Corinth and Paul's Corinthian Correspondence* (New Haven: Yale University Press, 2014).

- 
- <sup>3</sup> パウロの「ユダヤ教の生活様式」の民族的特質については、以下を参照。M. Konradt, “Mein Wandel einst im ‘Joudaismos’ (Gal 1:13),” in *Fremdbilder – Selbstbilder: Imaginationen des Judentums von der Antike bis in die Neuzeit* (ed. R. Bloch et al.; Basel: Schwabe, 2010), 25–67, esp. 39–41.
- <sup>4</sup> D. K. Buell, *Why This New Race: Ethnic Reasoning in Early Christianity* (New York: Columbia University Press, 2005), esp. 29–32, 36.
- <sup>5</sup> ジャンルについては以下を参照。H. E. Lona, *An Diognet* (KFA 8; Freiburg im Breisgau: Herder, 2001), 21–33.
- <sup>6</sup> 英訳は以下を参照。Trans. C. N. Jefford, *The Epistle to Diognetus (with the Fragment of Quadratus): Introduction, Text, and Commentary* (Oxford: Oxford University Press, 2013).
- <sup>7</sup> T. Nicklas, “Epistula ad Diognetum (Diognetus): The Christian ‘New Genos’ and Its Construction of the Others,” in *Sensitivity towards Outsiders* (ed. J. Kok et al.; WUNT 2/364; Tübingen: Mohr Siebeck, 2014), 490–504.
- <sup>8</sup> ディオグネトスにおける「新しい」については R. Brändle, *Die Ethik der “Schrift an Diognet” : Eine Wiederaufnahme paulinischer und johanneischer Theologie am Ausgang des zweiten Jahrhunderts* (ATANT 64; Zurich: Theologischer Verlag, 1975), 86–90 等を参照。「新しい人」は新約聖書のいくつかの箇所でも重要なテーマとなっている(エフェ 2:15、4:24。以下も参照。コロ 3:10–11、イグナティウス『エフェソ』 20:1)。
- <sup>9</sup> 民族性についての著述はしばしばヘロドトス 8.144.2 の有名な箇所を想起させる。ここではギリシャ人であることの四つ(あるいは五つ)の基準(血縁関係・共通の言語・神々の共通の聖所と供犠・類似の生活様式や慣習)が挙げられている。I. Malkin, “Introduction” to *Ancient Perceptions of Greek Ethnicity* (ed. I. Malkin; Cambridge, Mass.: Center for Hellenic Studies, 2001), 1–28 等を参照。「民族性」の六つの基準が挙げられる場合もある。J. Hutchinson and A. D. Smith (ed.), *Ethnicity* (Oxford Readers; Oxford: Oxford University Press, 1996), 6f.
- <sup>10</sup> 『ディオグネトスへの手紙』は、外来性と国民性の狭間における信仰者の生活に関して、キリスト教徒の、そして元来はユダヤ人の、いくつかの伝統を取り上げている。R. Feldmeier, “The ‘Nation’ of Strangers: Social Contempt and Its Theological Interpretation in Ancient Judaism and Early Christianity,” in *Ethnicity and the Bible* (ed. M. G. Brett; BibInt 19; Leiden: E.J. Brill, 2002), 241–270.
- <sup>11</sup> キリスト教徒の宇宙的・政治的役割については、以下に所収の資料を参照。H. I. Marrou (ed.), *À Diognète* (SC 33bis; Paris: Editions du Cerf, 1965), 146–171.
- <sup>12</sup> A. Lindemann, “Paulinische Theologie im Brief an Diognet,” in *Paulus, Apostel und Lehrer der Kirche* (Tübingen: Mohr Siebeck, 1999), 280–293 等を参照。
- <sup>13</sup> 特に古代のキリスト教文書の「民族性 *ethnos, genos*」に関する古典的用語の有益な調査として、以下を参照。A. P. Johnson, *Ethnicity and Argument in Eusebius’ Praeparatio Evangelica* (O ECS; Oxford: Oxford University Press, 2006), 33–51.
- <sup>14</sup> 2 世紀には、ユスティノスがキリスト教徒を「*panta ta ethnē* から引き出される、民族を超越する存在としての『異邦人』」と呼ぶような、別種の民族的用語が登場する。T. L. Donaldson, “‘We Gentiles’: Ethnicity and Identity in Justin Martyr,” *EC* 4 (2013), 216–241

(here 228).

- <sup>15</sup> A. von Harnack, *Die Mission und Ausbreitung des Christentums in den ersten drei Jahrhunderten*, vol. 1 (4th ed.; Leipzig: Hinrichs, 1924), 259–289 等を参照。
- <sup>16</sup> *Kerygma Petri*, frag. 5 (Dobschütz).
- <sup>17</sup> *Apol. 2.2* のシリア語テキストの読みを参照 (trans. B. Pouderon and M.-J. Pierre, SC 470, 189)。三つの人種はノアの三人の息子 (創 10:1) に遡ることができそうだが、著者はそのパターンをギリシャ人、ユダヤ人、未開人というヘレニズム・ユダヤ人的三組と融合させている。
- <sup>18</sup> 主なパターンは、偶像信奉者、ユダヤ人、キリスト教徒を包含している。偶像信奉者は更にカルデア人、ギリシャ人、エジプト人に分化される (2:2)。これはまさに続く弁論の論証を規定するパターンであり、ゆえに、テキスト伝承の後の説明と思われる。
- <sup>19</sup> Harnack はテルトゥリアヌスに言及しつつ、「三つの人種」の起源を多神教徒の伝統、すなわちキリスト教徒に対する非難の中に認める (Harnack, *Mission und Ausbreitung*, 281–289 [注 18 参照])。しかしテルトゥリアヌスの当該箇所 (Tertullian, *Scorp.* 10.10) は、歴史的事実であるよりも洗練された修辞の産物であるだろう。
- <sup>20</sup> 上述のヘロドトスの箇所 (注 9) を参照。
- <sup>21</sup> 特に以下を参照。F. Barth, “Introduction” to *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Difference* (ed. F. Barth; London: George Allen and Unwin, 1969), 9–38.
- <sup>22</sup> 古代の知恵議論の二つの例については、以下を参照。S. Vollenweider, “Toren als Weise: Berührungen zwischen dem Äsoproman und dem 1. Korintherbrief,” in *Paulus. Werk und Wirkung; Festschrift für Andreas Lindemann zum 70. Geburtstag* (ed. P.G. Klumbies and D. du Toit; Tübingen: Mohr Siebeck, 2013), 3–20.
- <sup>23</sup> パウロの「十字架の神学」については、以下を参照。S. Vollenweider, “Weisheit am Kreuzweg. Zum theologischen Programm von 1 Kor 1 und 2,” in *Kreuzestheologie im Neuen Testament* (ed. A. Dettwiler and J. Zumstein; WUNT 151, Tübingen: Mohr Siebeck, 2002), 43–58; M. Konradt, “Die korinthische Weisheit und das Wort vom Kreuz. Erwägungen zur korinthischen Problemkonstellation und paulinischen Intention in 1 Kor 1–4,” *ZNW* 94 (2003), 181–214.
- <sup>24</sup> 文化的特質の観点でのタティアノスに関しては、以下を参照。S. Vollenweider, “Barbarenweisheit? Zum Stellenwert der Philosophie in der frühchristlichen Theologie,” in *PHILOSOPHIA in der Konkurrenz von Schulen, Wissenschaften und Religionen. Zur Pluralisierung des Philosophiebegriffs in Kaiserzeit und Spätantike* (ed. Ch. Riedweg; Berlin: De Gruyter, 2017), 147–160.
- <sup>25</sup> Tatian, *Or. Graec.* 1.1, 2, 5 (trans. M. Whittaker, *Tatian: Oratio ad Graecos and Fragments* [OECT; Oxford: Clarendon Press, 1982]).
- <sup>26</sup> 例えば以下を参照。E. S. Green, “Jewish Perspectives on Greek Culture and Ethnicity,” in *Ancient Perceptions*, 347–373 (注 9 参照)。「(ユダヤ人は) ギリシャ人の国家と自分たちのそれとを区別しつつ、同時にギリシャの文明世界への自分たちの浸漬を正当化した」(366)。

- 
- <sup>27</sup> R. E. Ciampa and B. S. Rosner, *The First Letter to the Corinthians* (PiNTC; Grand Rapids, Mich.: Eerdmans, 2010), 497.
- <sup>28</sup> P. R. Trebilco, *Self-designations and Group Identity in the New Testament* (Cambridge: Cambridge University Press, 2012) によって提示されている初期キリスト教徒の自称のリストが、いかなる特定の民族的概念も含んでいないことは偶然ではない。
- <sup>29</sup> 例えば以下を参照。G. D. Fee, *The First Epistle to the Corinthians* (2nd ed.; NICNT; Grand Rapids, Mich.: Eerdmans, 2014), 471f. 20 節の「律法の下にある人」は、手っ取り早くはユダヤ人の同義語と理解されるが、Concannon, “When you were Gentiles,” 30 (注 2 参照) は「パウロはここでモーセ律法の要求に従おうとしてきた異邦人に言及している」と述べる。この見解は、ガラテヤ共同体から我々が知るところの状況により適合しているだろう (ガラ 4:21)。
- <sup>30</sup> D. Zeller, *Der erste Brief an die Korinther* (KEK 5; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2010), 319.
- <sup>31</sup> 神の代理人の一つのパターンとしての謙遜は、既にあレクサンドリアの教父たちによって認識されていた。S. Vollenweider, *Freiheit als neue Schöpfung. Eine Untersuchung zur Eleutheria bei Paulus und in seiner Umwelt* (FRLANT 147; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1989), 217f 等を参照。
- <sup>32</sup> Concannon, “When you were Gentiles,” 27–46 (注 2 参照) は、パウロの自制 (24–27 節) に言及し、彼の適応可能な自己 (「彼の民族的に順応性のある体」) が、他者への彼の隷属から生じていると解釈する。「パウロの民族的に柔軟な体は、コリントの人々に対して、禁欲的な自制と神の召命の無私なる実行のモデルとして提示されている」(35)。
- <sup>33</sup> これは「全人種と階級を異邦人世界の範囲内に囲い込む一般的な表現法」である。J. D. G. Dunn, *Romans 1–8* (WBC 38A; Dallas, Tex.: Word Books, 1988), 33.
- <sup>34</sup> 幾分異なる立場として以下を参照。C. J. Hodge, *If Sons, then Heirs: A Study of Kinship and Ethnicity in the Letters of Paul* (Oxford: Oxford University Press, 2007), esp. 137–148.
- <sup>35</sup> 最近の英米の聖書解釈では、N. T. Wright, *Paul and the Faithfulness of God* (Christian Origins and the Question of God 4; London: SPCK, 2013) によって、「救済史 (Heilsgeschichte)」の位置付けが一新されている。C. Heilig et al. (ed.), *God and the Faithfulness of Paul: A critical Examination of the Pauline Theology of N. T. Wright* (WUNT 2/413; Tübingen: Mohr Siebeck, 2016) 所収の議論を参照。
- <sup>36</sup> 「パウロは・・・文化的な特異性を『消去』あるいは『根絶』するのではなく、それらを相対化するのである」(原著では傍点はイタリック)。J. Barclay, “‘Neither Jew nor Greek’: Multiculturalism and the New Perspective on Paul,” in *Ethnicity and the Bible*, 197–214, here 211 (注 10 参照)。